B 160　ドレスの色彩嗜好と形態、素材との関係（第3報）／80～81年秋・冬物／

東京家政大家政　木曽山かね　東京家政学院短大　今井弥生　○愛知
三河織維技術　志賀津発司

目的　色彩、意匠学部会の調査研究グループは、引続き都内ならびに近隣から通学する学生が、被服構成ワンピース、ドレス製作実習に際し、秋・冬物を対象に各自が最も着用したいスタイルに適した生地を購入、製作させ、その色彩、形態、素材、柄と、80～81年の流行環境実態を分析、検討し、被服製作の基礎資料とする。

方法　対象　東京家政学院短大、家政科学生191名（80年90名、81年101名）年令　18～19才、生地購入時期　80年10月、81年10月、検討、素材生地の識別、日立製自記分光光度計で測色、色調とスタイル傾向、シルエットと流行、ウエストとデザインの関係、流行環境並びにボトムのアイテムについて調査した。

結果　生地素材は羊毛が95％以上であった。色調は／80年代より、81年はやや明るい傾向を示した。色調（明度と彩度）との関係は、80、81年共に正相関が認められた。柄は全体ものが多い中で先染に使はれている色調は、中間色の組合せが多い。シルエット衿の傾向は、／80年に比べVネックが減少し、ラウンドネックが主流となった。明るい色調傾向については、若干きシルエットならびにボトムのスリム化が進出し、スカート丈が長い、しかし青系色調素材を選んだ被験者のシルエット傾向は保守的でスカート丈も長いのが特徴であった。